イスラームの栞 新連載 第1回

「イスラームの基本理念」

東京国際大学特命教授　国際交流研究所長／筑波大学名誉教授　**塩尻 和子**（しおじり かずこ）

1．誤解される宗教

イスラームという宗教が、外側から偏見と誤解をもたずに眺められるということは、西暦610年にこの宗教が始まって以来、ほとんどなかった。ユダヤ教、キリスト教と同系の伝統をもつ兄弟宗教、つまりアブラハムの宗教でありながら、最後に生まれた若い宗教として差別され続けている。しかし、発祥から1400年以上の歴史を通じて、イスラーム支配下では、他宗教との間におおむね平和的な共存が実現しており、1922年のオスマン帝国の滅亡まで、イスラームは、政治的にも文化的にも世界の中心となっていた。

その後もイスラームは世界に広がり続け、今日では13億人から16億人の信徒数を擁していると推定される。イスラームの外側では、あたかもイスラームが劣等な宗教として後進性や貧困、政治的混乱などと同義語のように語られるが、イスラームの内側では、イスラームの教えと戒律のもとで宗教的救済を求めて多くの人々が暮らしている。

グローバリズムの進展の中で、政治的にも経済的にも困難な時代を迎えているいま、世界第2位の宗教勢力を擁するイスラームについて、偏見や蔑視を排して、世界宗教としての理念と現実を学び、客観的で有効的な対話を進めることが必要であろう。

2．「イスラーム」の意味

イスラームで信仰の対象となる「神」は「アッラー（Allāh）」と呼ばれるが、これはアラビア語で「神」という意味の語である。アラビア語で書かれたキリスト教の聖書でも、神はアッラーであり、アッラーという名前をもつ神ではない。「アッラーの神」という表現は誤解を与えるので、本稿では全て「神」と表記する。

「イスラーム（al-Islām）」の意味は「服従、平定、平和」などで、ここから神に全てを委ねることという意味が生じて「唯一なる神への絶対帰依」という用語となる。宗教の名称なのに「教」をつけないのは、イスラームという言葉に「道、教え」などの意味が含まれているからであるが、日本語で「イスラム教、イスラーム教」などと呼んでも間違いではない。

イスラームの教えの特徴を簡潔に表現すれば、「神への絶対服従」「平等」「相互扶助」となる。「神への絶対服従」と聞けば、頑迷な隷属や盲従を意味しているように感じられるかもしれないが、これはユダヤ教・キリスト教の「神への愛」「神への信仰」、仏教の「仏への絶対帰依」などの教義と同じことを意味している。神に服従し神の教えを遵守することによって、人間の精神が救済され心の平安が得られるとすれば、イスラームもまた人間の不安を癒し、人生を導く「救済宗教」であるということができよう。

また人類の「平等」と「相互扶助」の教義も、キリスト教の「平等」と「隣人愛」と変わることはない。しかもイスラームでは、「相互扶助」の実行を、基本的な儀礼である五行（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）の中に喜捨（ザカー）という義務行為として設定している。この喜捨は、一定の税率を課す、いわば宗教税であり、貧者や未亡人、旅人など保護の必要な人々を、異教徒であっても、援助するために用いられる。「隣人愛」の実践が、義務の儀礼的行為となっている宗教は、世界でもイスラームだけである。

３．在家の宗教

イスラームは仏教やキリスト教とは異なり、出家や隠遁生活、修道院などを評価しない在家の宗教であり、政教一致的な理想をもっている。「政教一致」などというと、それこそ後進的な印象を与えるが、ヨーロッパ中世のように、政治的権力と宗教的権力の一致を語っているのではなく、政治や社会の運営に宗教的な道徳が実現されることを理想としている。この意味では、どの宗教においても同様の教義がみられる。英語の政教分離がthe separation of church and stateであることも、これを意味している。

イスラームが在家の宗教であるという意味は、人間の霊的な側面のみを高位におくことをせず、精神的にも社会的にも普通の日常生活の中にこそ宗教的な修行の場があるとする点にある。宗教法が、宗教儀礼だけでなく政治や経済、国際関係にまで直接の指示を与えているので、一般的な宗教の枠内には納まらない多様性がある。現在、多くの外国企業を悩ませている利子のない銀行や、イスラーム金融なども、この宗教法に起因する。（宗教法シャリーアについては、次回に説明する。）

イスラーム社会では、上に述べたように、出家や隠遁生活を評価しないので、原則として聖職者を認めず、教会や本山にあたるような教団組織も持たない。そのために、共同体（ウンマ）の決定事項については、信徒ひとりひとりの見解の一致が重要視される。しかし、実際にはウラマーと呼ばれるイスラーム法学者の見解の一致が実効力をもっている。ウラマーはイスラーム社会の指導者として、ある意味では聖職者の役割も果たしているが、彼らの見解や発言には「神聖性」は認められていない。そもそも、ウラマーになるための資格試験などもなく、イスラーム法について博識で尊敬される人々が、信者によってウラマーだと認められる、という、ある意味で長閑な社会である。

たとえば、アメリカ軍によって暗殺されたウサーマ・イブン・ラーディン（ビン・ラディン）は、多数の信者によってウラマーであると認められてはいなかったが、自らウラマーであると称して、宗教法的な回答や見解（ファトワー）を発出していた。本山制度や教会組織を持たないイスラームでは、誰でもが指導者にも宗教法の専門家にもなれる、という点には、長所も欠点もあるということができよう。（ただし、少数派のシーア派では状況はかなり異なるが、この点も次回以降に説明する。）

ウズベキスタン、イスラーム大学の女子学生たち。人々は、ソ連時代に宗教の実践を禁止されていたために、飲酒もするし豚肉も食するが、心の中では、敬虔なムスリムだと思っている。

2013年4月24日、カタル、ドーハで開催された第10回ドーハ国際宗教間対話会議にて、サウジアラビアから参加したある女子大のサラ教授と。サラ先生は長男をお供に出張してきていた。ワッハーブ派という厳格な宗派を奉じるサウジアラビアでは女性の一人旅は禁止されている。